子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2001年11月　NO.104

「panspermiaの習作1」　荒木陽一

〈もくじ〉

あなたの町の「龍馬郵便局」……高橋由美子　2
白いクジラ……能祖将夫　3
神有月……森田勝瀧　4～5
「ヒバリと文学」……桝田隆宏　6～7
耳と指と人……吉岡邦廣　8～9
ハバナ・土佐和紙展に参加して……玉造義隆　10～11
街のエクステリア「アートボード高知」……山本嘉博　12
おんな三題　その三……真田順子　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

あなたの町の「龍馬郵便局」

高橋由美子

今年も「よさこい祭」初日八月九日を迎え、〝龍馬〟と局名改称して二年が過ぎた。それまで上町地区には「高知上町」・「高知上町一」と局名の酷似した郵便局があり紛らわしく、かなり前から区別のできる局名にとの要望があった。平成五年、龍馬研究会の機関誌へ「ゆかりの地に欲しい郵便局」と題して龍馬生誕地にある高知上町一郵便局を「龍馬郵便局」として全国発信し、龍馬切手・龍馬貯金・龍馬ローン等は如何なものか、龍馬の自由な発想に学ぶべきではないかとの提言があり、早速上申をしたが局名に実在の人物の名前は付けないとの理由で実現しなかった。

その後松尾高知市長の「龍馬郵便局を作りましょう」との強い要望に後押しされ、やっと平成十一年八月九日、全国で初めて実在の人物の名前の付いた郵便局として誕生することができた。

除幕式は、前夜からの雨が上がり青空の広がるなか、松尾市長、浜川市議会議長、小椋龍馬記念館館長、上町町内会会長等地域の方々の参加により盛大に行われた。龍馬姿の高知市長、郵政局長が揃って龍馬郵便局の除幕、くす玉を割り、地元上町婦人会による龍馬をテーマとしたコーラスで花を添えていただいた。

この日は絵入りはがき「坂本龍馬とあったか高知」、「龍馬局名改称記念台紙」の発売日でもあり龍馬像と生誕の碑をデザインした風景印を求める郵趣家（切手等の収集家）、龍馬ファンで終日大賑わいとなった。県内・四国はもとより、京阪神・中国・九州方面からの来局もあった。

お祝いレタックス（電子郵便）は全国より寄せられ、北海道から鹿児島まで六十八通にもなった。龍馬が妻おりょうと日本で初めての新婚旅行に出かけた鹿児島から薩摩龍馬会会長はじめ十通、龍馬が海援隊の本拠地を置いた長崎からは長崎市長が「長崎市は龍馬と大変ゆかりがあり、最初の商社といわれる亀山社中はじめ多くの史跡があり、龍馬を通じますます両市の交流が深まることを確信しています」。地域おこし団体「亀山社中ば活かす会」は「龍馬郵便局を拠点に両市の交流がさらに豊かなものになることを願っています」。龍馬と関係の深い偉人松平春嶽・横井小楠・由利公正ゆかりの地福井市長、薩長同盟の山口県から下関市長・萩郵便局長、龍馬の活躍の場であり龍馬の眠る京都市より京都月見山郵便局、船宿「寺田屋」の地元京都油掛郵便局、坂本家の子孫が移住した北海道浦臼町坂本龍馬会、「織田信長水軍大将九鬼嘉隆発祥の地」鳥羽郵便局長、「四国ゆかりの武将蜂須賀小六家政生誕の地」愛知県美和歴史民俗資料館、「山内一豊生誕の地愛知木曽川町」木曽川玉井郵便局長、名古屋南陽道郵便局長からは「人気者きんさん・ぎんさん」の色紙、開国の町伊豆下田郵便局長より「二十一世紀に築く郵便局としてご発展を祈る」、龍馬脱藩の道筋より葉山西・津野山郷・越知面・東津野山船戸各郵便局よりと全国各地からの激励に驚き、感激したことであった。

その後、龍馬像を配した特殊ポストの設置、ふるさと切手「桂浜と龍馬」の発売、平成の「薩土同盟」、龍馬からの年賀はがき、局名改称一周年記念台紙「新政府綱領八策」（龍馬船中八策をもとにした）、龍馬新婚旅行だよりを取り入れた二周年記念台紙の発行と、数々の龍馬施策を行ってきた。

全国各地より「一度来てみたかった」と訪れて下さる龍馬ファン、郵趣家の方とのふれあいにより、いかに龍馬が愛されていたか、龍馬に勇気づけられ希望を見出しているかに驚かされる。

出会いの達人龍馬のおかげで多くの方との出会いができ、学ぶことは多い。地域に支えられ、龍馬ファンに支えられた二年間を振り返り、「あなたの町の郵便局」としての役割を見出していきたいと思う。

（たかはしゆみこ／龍馬郵便局長）

白いクジラ

能祖将夫

初めて高知を訪ねたのは昨年二月のこと、その時、実にドラマティックな出会いが私を待っていた。

昨年の二月十六日、私は（財）地域創造の主催する「ステージラボ」という、全国の公共ホール職員を対象にした研修会のお手伝いのために、高知へと飛んだ。飛行機が間もなく高知空港へ着くというとき、窓の下に広がる海をぼんやりと見下ろしていた私は、こんなことを考えていた。「もーすぐ高知か。高知って言やぁ、クジラだな。クジラでも泳いでいないかなぁ。ま、ンなことあるわけないか」。

ところがである。見えたのだ、クジラが。しかも二頭。飛行機の窓から見下ろす一面の青い海を、白いクジラが二頭並んで確かに泳いでいる。そう、それは白いクジラだった。ハッキリクッキリ白いクジラが、くどいようだが、しかも二頭。

私はあせった。今、自分がハッキリクッキリ見ているにもかかわらず、自分でも俄かには信じがたい。大声を上げて「クジラだぁ！」と叫びたいのだが、そうもいかない。たまたま私の席はスチュワーデスさんと向かい合う席で、彼女にそっと「あれ、クジラですよね」と話しかけながらお近づきになりたいという邪念が頭をよぎりもしたが、それもままならない。一瞬たりとも目が離せないのだ。目を離せば、すぐにも消えてしまいそうな気がして。

会場である高知県立美術館に着き、ステージラボの仲間たちと合流した私は、息せき切ってそのことを話した。だが、相手は親愛なる悪い（？）仲間たちである。誰も信じちゃくれやしない。挙句の果てに、どこかの国の偵察用潜水艦でも見ちゃったんじゃないの、などとからかわれる始末。そっちの方が信じられないっつーの。しかも、偵察用潜水艦が白いはずないっつーの。

だが、神は見放さなかった。県立美術館の心優しきF氏が、傷心の思いで東京に帰った私のもとに、地元紙の切り抜きを送ってきてくれたのだ。その記事の見出しは、「おらんくの池にクジラ2頭・浦戸湾遊泳1時間」、二月十八日付けの高知新聞である。記事には「十七日午後、高知市の浦戸湾にハナゴンドウクジラとみられる二頭が迷い込んだ」とあり、その勇姿を写したカラー写真が二枚も載っている。

かくして私は高笑いをし、私の中で高知はワンダーランドと化した。出会いの場＝高知、驚きの地＝高知、不思議の国＝高知。

その高知を二度目に訪ねたのは今年の八月のこと。高知市文化振興事業団のお招きを受け、「月猫えほん音楽会」という公演を打つために我々一行は高知へと降り立った。「月猫えほん音楽会」というのは、絵本の朗読とジャズピアノの即興演奏の組み合わせをベースにしたファミリー向けのステージだ。この時、私には心に決めていたことが一つあった。あんなに素敵な出会いを用意してくれた高知、そこに暮らす子供たちのために、うんと楽しいステージを届けたい。「月猫えほん音楽会」は、満月の夜に集う猫たちの不思議な集まりという舞台設定を取っている。出演者も全員猫に扮していれば、会場の子供たちにもフェイス・ペインティングを施して猫になってもらっている。読み猫という役で朗読を担当する私もまた猫の姿になっているわけだが、心はあの白いクジラだった。

来春、「土佐の新しいシンボル」をキャッチフレーズに多機能ホールを備えた高知市文化プラザ「かるぽーと」がオープンすると聞いている。この文化プラザもまた、ワンダーランド＝白いクジラとして、高知に暮らす人々にとっての出会いの場、驚きの場、楽しみの場となってほしいと願っている。

（のうそまさお／（仮称）北九州芸術劇場準備事務局プロデューサー・櫻美林大学非常勤講師）

神有月

森田勝瀧

陰暦十月のことを神無月という。島根県出雲地方では神有月と呼ぶ。神有月という言葉は、室町時代の辞書『下学集』に見られ、かなり古い時代から、全国の神々が出雲大社に集合され、男女の縁結びはもちろんのこと、世上の諸事を神議されるのだと信じられていたことがわかる。

日本書紀の神代巻には「吾が治す顕露の事は、皇孫まさに治めたまうべし、吾はまさに退きて幽れたる事を治めん」と記され、以来出雲の大国主命は神事、すなわち目に見えない幽事を司ることとなったと伝えられている。

この出雲大社で昨年、直径一メートル三十センチの杉の巨木を三本束ねた、巨大な柱が発見された。古代神殿の基礎の柱である。

現在の国宝御本殿の高さが八丈、二十四メートル、中古は十六丈、四十八メートル、上古は、三十二丈、九十二メートルという伝えがあるが、今回の大発見で中古四十八メートルの御本殿が実証されつつある。

「やはらぐる光や空に満ちぬらん、雲に分け入る千木の片そぎ」平安時代末期に、寂蓮法師が出雲大社に詣でて、雨雲のたなびく裏山の中半まで、御本殿の千木・鰹木が見えていた様子を詠じている。

平安時代初期、源為憲のあらわした『口遊』の中に「雲太・和二・京三」とあり、一番の太郎は出雲の御本殿、二番の二郎は奈良の東大寺大仏殿、三番の三郎は平安京の大極殿だというのである。

そして、この図面がなんと金輪の造営図として、八十三代目出雲大社宮司、千家国造家に伝えられており、本居宣長著『玉勝間』にも収められている。

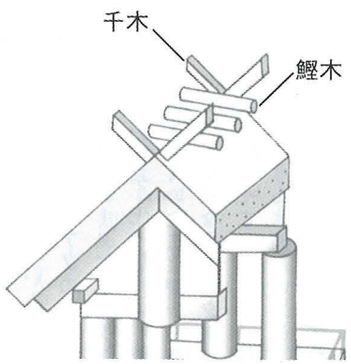
上古の社殿の柱が、あまりにも巨大すぎたので、三本の柱を鉄の輪で緊縛して、直径三メートルにもなる一本の柱としたものと想像される。しかしその技術もさることながら、この建築にかかわった多くの人々の信仰のパワーにも驚嘆させられる。

正確な年代は特定されていないが、平安時代から鎌倉時代の遺構といわれている。平安から鎌倉といえば約一千年もさかのぼることになる。

神社で唱える祝詞の中に「子孫の八十続、厳し八桑重の如く立栄え」という慣用句がある。子孫が八十代も永遠に、いよいよさかんに木が茂り、繁栄してゆくようにという祈りを込めた言葉である。

今、一人の人間がこの地球上に生を受けるために、果たしてこの巨柱が立ち上がった頃まで千年さかのぼると、いったい何人の親、先祖様が必要だろうか。一代を二十年として千年間に約五十代。私の卓上計算機では三十三代が限界であった。その数、なんと八十五億八千九百九十三万四千五百九十二人である。現在の地球上の全人口を遥かに上まわってしまうではないか。

先日、〝NHKスペシャル〟で「日本人の源流」という番組が放送された。二万三千年の昔―縄文時代の日本人のDNAが、旧ソ連邦バイカル湖周辺に居住したブリヤード人と共通していたという。また、日本語の起源を研究している大野晋氏は



〝一語の辞典〟『神』の中で、日本語の基本である、稲作文化の基本語がインド南端のタミール語に共通しているという。

人類の起源は、百万年前とも二百万年前ともいわれるが、今現在の私という個人が存在するために、どれだけの世界人類がかかわり、祖先の思いがあったかを考えてみると、それは地球規模でグローバルな視点に個人を導いてくれる。

そしてまた、代々、受けついで片身と残った個々の命が、今五十億を超えようとする人類であるとすれば、ただ単に祖先崇拝の信仰と言われるまでもなく、全世界の人類がこの思いを共有できるのではないだろうか。

昨今の新聞は連日のように、凄惨、壮絶な記事が紙面を賑わしている。反面、『千と千尋の神隠し』という映画が話題となり、環境破壊の中で心の問題をきびしく指摘している。青少年にあるまじき様々な犯罪、事件に対して、心の世界へのあこがれ、願望が象徴されているように思う。

明治天皇の御製に「さし昇る朝日の如くさわやかにあらまほしきは心なりけり」とある。先日、日和佐の大浜海岸を訪れる機会を得た。言わずと知れたアカウミガメの産卵地であり、東南に向かって開けた、太陽の光を燦々と受ける海岸である。この浜で生まれた亀は、生まれた場所に帰り産卵するという。孵化したばかりの亀は、朝日に向かって歩みはじめるという。

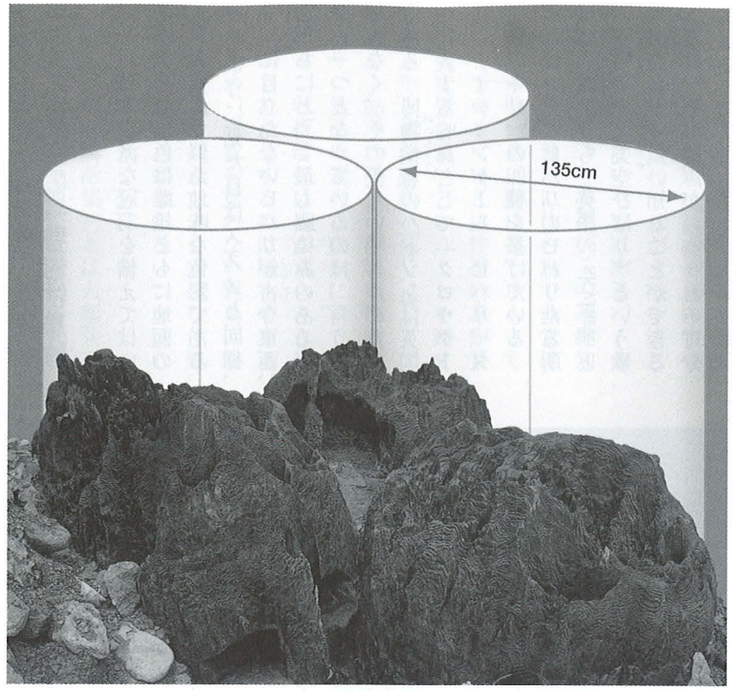
秋分の日が近づくと、彼岸花が野辺を彩り、太陽に向かって燃えるような花を咲かす。しかし、その根っこに思いを致す人は少ない。

「神棚をどちらの方角に祀ったらよいでしょうか」という質問をよく受ける。朝日の当たる方に向けてお祀りしなさいと答えている。

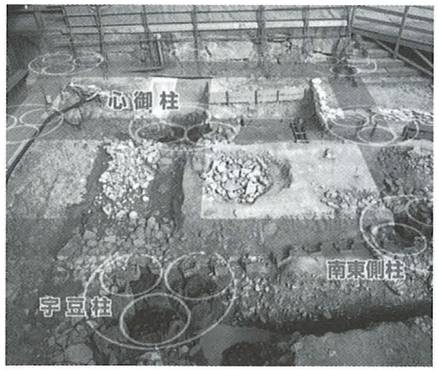
信仰と思想、信条と一緒には語れないかもしれないが、少なくとも、心の中の世界は、目に見えない世界である。出雲大社では、目に見えない世界のことを幽冥といい、目に見える世界のことを顕世といい、「幽顕一如」という言葉がある。

もうすぐ十一月二十四日（旧暦十月十日）、出雲の稲佐の浜では、全国から何千人という人々が集い、津々浦々の八百萬の神々を迎える「神迎」が行われ、神有祭が奉仕される。一千年の時を隔てて発見された巨大柱は、世界人類が平和で繁栄してゆくようにと祈る先祖の思いと重なる。思想・信条そして信仰によってテロや戦争という愚かな行動に突き進んでゆく人間の罪やケガレに、どのような神議が下されるのであろうか。

伊勢　出雲　幽と顕とに治り分けて
　尊くもあるか　やまとしまねは
（もりたかつたき／出雲大社土佐分祠）



▲史上最大の三本束ねの柱



発見された柱の位置関係

「ヒバリと文学」

桝田隆宏

眩しい美空の「春告げ鳥」

ヒバリは立派な冠羽を備えてはいるが、その体色は雌雄ともに地面の色と大変よく似た地味な色彩である。このように見た目はスズメと同様、一向に目立たないヒバリが古今東西、私たちにとって最も馴染みのある野鳥の一つとなっているのは、言うまでもなく、その美しい鳴き声のためである。博物学者のハドソンは英国を代表する鳴鳥として「クロウタドリ、ナイティンゲール、ヒバリ、ヌマヨシキリ」の四種を挙げている。

とはいえ、ヒバリのヒバリたる所以は、何よりも、英語のskylarkという言葉や《美空ひばり》という歌手の芸名から窺い知ることができるように、その美声が「空」と不可分に結びついているという点にある。「揚げひばり声も姿も光となりて」という俳句は、春の風物として有名なヒバリの姿を余す所なく捉えている。ちなみに、その名の由来は〈日晴〉、つまりこの鳥が晴れた日に空高く昇って鳴く習性にあると言われている。

次に、ヒバリは夜明けを告げる「朝告げ鳥」であり、その鳴き声は「歯切れのよい澄み切った調子」と形容される、歓喜に溢れた音色を特色とする。つまり、ヒバリは〈空〉や〈光〉と結びつく上昇的な「飛翔のシンボリズム」である、と同時に〈美〉や〈喜び〉を与える「春告げ鳥」にして「朝告げ鳥」なのである。

だとすると、「至福」を意味する英語慣用句、"as happy as a lark"（ヒバリのように幸福）という表現が端的に示すように、たとえ青い鳥ではなくても、ヒバリは疑いもなく「幸福をもたらす鳥」、換言すれば〈幸福のシンボル〉であると言えよう。

泰西の神と文人に最も愛される鳥

と見てくれば、文芸の世界に登場するヒバリもまた、明暗のイメージやシンボルを併せ持つナイティンゲールなどの夜の鳥とは異なり、圧倒的に「明」一色のイメージで覆い包まれ、詩人や文人たちから最大限の注目と賛美を浴びてきたのも首肯できる。洋の東西を問わずヒバリが登場する文芸作品は数々あるが、ここでは『イソップ寓話集』（紀元前六世紀頃）の「雲雀と農夫」、それに我が国でも上田敏の訳で人口に膾炙しているロバート・ブラウニングの『春の朝』（一八四一）について見てみよう。

最初に、「雲雀と農夫」を中務哲郎訳『イソップ寓話集』（岩波文庫）から見てみよう。

雲雀が若草の中に巣を営んでいた。明け方には黒頭雲雀の囀りに唱和し、すでに冠も生え羽根も強くなった雛を、麦の葉で育てていた。畠の主が見回りに来て、黄金に色づいた稔りを見ると、「取り入れに仲間の衆を呼び集める時だ」と言った。冠を生やした小雲雀が一羽、これを聞いて父親に告げ、自分たちをどこに移すか考えて欲しい、と頼んだ。父親はしかし、「まだ逃げなくていい。仲間を頼りにする人は、そんなに急いでいないものさ」と言うばかり。

畠の主が再びやって来て、麦の穂が陽の光を浴びて、はやこぼれそうになっているのを見ると、次の日刈り手を雇うこと、束の運び手も雇うことを段取りした。すると雲雀が幼い子らに言うには、「今こそ本当にここから逃げる時だ。仲間を当てにせず、自分で刈るというのだから」。

一読して自明のごとく、この寓話に込められた教えの意味は簡単明瞭である。が、問題は数ある鳥の中で何故にここではヒバリが主役を演じているのか、という点にある。

その疑問は、〈鳥類学〉の基礎知識《ヒバリ＝地上に住む鳥で非常に警戒心の強い鳥、脚は長く爪もよく発達している、ことに後指の爪が長い、大変賢い鳥》ということを踏まえた上で、英国版の『野と森の鳥』にある一節、「ヒバリは地上性の鳥であり、地面の適当な窪みに草で巣を作る。収穫時には巣が荒らされたり、壊されたりするのは屡々である。そのため、注意を怠らない親鳥は雛を足指の爪で掴んでより安全な住処へと運ばなければならない」を読む時、氷解する。

『イソップ寓話集』とは人類共通の古典であり、動物に仮託して人間生活の諸相を描いた傑作とはいえ、「雲雀と農夫」に於ける物語の内容と動物の選定に思いをはせる時、さすがはイソップと感服せざるを得ない。ちなみに、ヒバリは分布の関係上、北米や『聖書』そのものには全く登場しない鳥である。では次にブラウニングの『春の朝』を見てみよう。

時は春
日は朝
朝は七時
片岡に露みちて
揚雲雀なのりいで
蝸牛枝に這ひ
神、そらに知ろしめす
すべて世は事も無し。

この詩が彷彿させるものは「春の朝の清々しい光に満ちた世界」そのものであり、「すべて世は事も無し」と謳う詩人の思いの底にあるものは、紛れもなく楽天主義的世界観である。ここには、大伴家持の歌、「うらうらに照れる春日にひばりあがり心かなしもひとりし思えば」に見られる春愁の哀しみなどは絶無である。

それというのも、一八五〇年代が始まると共に、英国は有卦に入り前後に類を見ない繁栄を見ることになったからである。「イギリスは十九世紀の五〇年代と六〇年代に自由貿易の最盛期を迎える。文明の進歩と繁栄を謳歌する声の高まるなかで、〈すべて世は事も無し〉と歌ったロバート・ブラウニングの詩の文句のように、ヴィクトリア女王の治世はその黄金時代を迎えたのであった」という今井宏（「イギリスの歴史と地理」、小池滋監修『読んで旅する世界の歴史と文化：イギリス』新潮社）の言葉は、その何よりの証左である。

ヒバリが詩人や文人たちから最も愛され、賛美されるだけではなく「どの鳥にもまして天空の神の嘉する鳥」だとするなら、この鳥が幸せに満ち溢れた喜びの世界、換言すれば、ヴィクトリア朝時代の大英帝国という至幸の楽天界で「画竜点睛」の大任を果たす《銀幕のスター》として『春の朝』に登場しているのも何ら不思議ではあるまい。漢名でヒバリのことを「告天子、叫天子、天雀、噪天」と並んで「楽天」とも言うのもむべなるかなである。

懐かしき雲雀の姿いま何処

それにしても、この楽天界に姿を没してしまったヒバリは一体今どこへ消えたのであろうか。春が巡り来れば、懐かしい草花が可憐に顔を出し、畑の麦は嬉々として風に踊る。しかし、一茶に「美しや雲雀の鳴きし迹の空」と詠ませた主人公は、待てど暮らせど、声も聞こえなければ姿も見せない。

高知新聞（平成十二年八月一日夕刊）は「ヒバリなどの繁殖地激減」という見出しのもとに、日本野鳥の会の調査では、この二十年間（一九七八～一九九八）で、我が国ではヒバリの繁殖地域が激減し、その原因は農地や草原の減少と農薬の使用等による環境破壊にある、と報じている。

人間に最も馴染みのある野鳥の一つであり、また文芸の世界でも鳥類最高の人気役者として歴史に残る数多の役を演じてきた名優のヒバリ。しかし、この鳥はその不滅の名声とは裏腹に、今まさにその姿をこの地上の一角から急速に消しつつあるのである。

近年の「英語ブーム」にもかかわらず、我が国の若者たちの間で英米文学への関心や興味が枯れ細り、人の世に潤いがなくなったのも、このヒバリの激減という憂慮すべき現象が何処かで深く関わっているのではなかろうか。

（ますだたかひろ／高知大学教授）

耳と指と人

吉岡邦廣

私は視覚障害者である。そして、現在大学の四回生でもある。そんな視覚障害者の読書事情なるものについて書かせていただきたいと思う。読書事情などというと、「おっ、なんだなんだ、なにかすごそうだぞ」という感じになってしまうが、そんなことは全くないことを断言しておこう。みなさんが読み進められていくうちに明らかになってくることであろうが、私の頭は風船のごとく軽い頭なのである。そんな私の書く文章なのでたいしたことはないのであるが、「これはとある視覚障害者の読書生活について書かれたものなのだな」と思いながら読んでいただければ幸いである。

それでは、まず私が視覚障害者となったいきさつめいたものについて書いておこう。そもそもの原因は、緑内障という眼病である。病名をご存じの方も、多いことだろう。白血病の治療のために用いたステロイドの副作用により、五歳のときに発病した。それから、なんとか進行を防ぎつつ過ごしてきたのであるが、浪人時代の無理がたたって、昨年の二月についに失明した。浪人生活というものは、暗くてじめじめしていて、精神的にも肉体的にも、あまり良くないものだなと、あらためて思う。

話を進めよう。私達は、どのような手段によって、情報を収集するか？　それは音声と点字によってである。残された四つの感覚、すなわち嗅覚・味覚・聴覚・触覚のうち、聴覚と触覚を使うわけである。犬のごとく嗅覚を、ソムリエのごとく味覚を利用して情報を収集するというのもおもしろそうであるが、これはこれでとても疲れそうである。

音声を利用するものとしては、カセットテープ図書がある。カセットテープに朗読を録音するものである。そして、点字。点字とは六つの小さなでっぱりの点の組み合わせによって、文字や記号を表す表音文字である。もともとは、軍隊が夜間に照明ナシで通信が行えるよう、開発した文字である。どんなものが、どんな場所で結びつくかわからないから、世の中というものはおもしろいものである。

さて、視覚障害者の読書スタイルとしては、このように音声を利用したものと点字を利用したものとの二種類があるのだが、主流はどうやら録音図書になりつつあるようだ。その理由としては、中途失明者の増加がある。

視覚障害者の分類の仕方の一つに、先天性と後天性とがある。糖尿病などの成人病により後天的に失明した人を、中途失明者と呼ぶ。点字というものは一種の特殊技能であり、適応力のある子供時代に身に付けておかなければ、修得が難しいのである。小・中・高と野球を続けてプロになった野球選手を先天性の視覚障害者にたとえるならば、後天性の視覚障害者は、いきなりダイアモンドに立たされた観戦客といったところであろうか。そういうわけで、中途失明者の増加とは、つまり点字人口の割合の減少につながるのである。

点字も読めることは読めるのであるが、かくいう私も録音読書派である。一応大学生であるので、読む本は学術書が多い。市販されている書籍を、音訳ボランティアさんにカセットテープに吹き込んでいただいている。

しかし、カセットテープ図書には問題点もある。それは、カセットテープを保管するために、大きなスペースが必要なことと、読みたい箇所がなかなか見つからないことである。すこしページ数の多い本になると、カセットテープ二十巻をこえる。何冊も音訳していただくと、じわりじわりと生活スペースを浸食し始めるのである。また、膨大なカセットテープの山から、読みたい箇所を探すとなると、これはもう、砂浜からビーズの一粒を探している気分である。

プレクストーカー

しかし、現代の技術進歩はめざましい。こうした問題を解消すべく、CD図書なるものが発明された。CD一枚に五十時間もの録音が可能である。さらに、プレクストーカーとよばれる専用の再生機を使うことで、ページごと・一文ごとに読ませることができ、あとで読み返したい箇所にチェックを入れておけば、いつでもその箇所を読み返せるのだ。

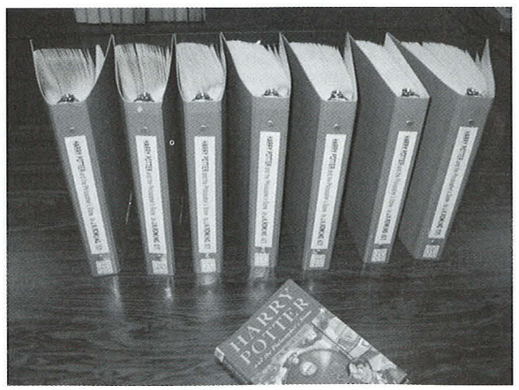
機器の進歩が視覚障害者にもたらす影響は、測り知れない。新機器の登場により、私達の生活は大きくかわる。不可能が可能にかわる。気分は、まさに、初めて火を発見した原始人といったところである。こんなわくわくする感動が味わえるなら、視覚障害者として生活するのもまんざら悪くないなと思うことも、しばしばである。

話がちょっとずれてしまった。本題に戻ろう。時間の制約上、速く本を読み終えることのできる録音図書を、私は普段使っている。しかし、点字本も好きである。点字本はゆっくりと自分のペースで読むことができ、深く行間を味わうことができるからである。感覚としては、録音図書よりも点字本の方が、実際に目で読んでいる感覚に近い。

これに対し、録音図書は、再生される音声との〈競走〉である。読みやすい、かるい小説なら、「ちょっと待ってよ」ですむのだが、理論づくめで、ボタンを一つ掛け間違えるとあとがぐたぐたになってしまうような学術書は、そうはいかないのである。「あっ！待って、待って！おいてかないで!!」という状態になり、巻き戻し・再生ボタンの連打状態に陥ってしまうのである。

私が個人的に、「これは録音図書に向いていないな」と思うものには、他に外国語の原書がある。外国語のヒアリングが得意な人は、非常に少ないであろう。やっぱり外国語の原書を読むのには、点字が最適だと私は思うのである。

しかし、ここでまた新たな問題が、頭をもたげてくる。それは、外国語の点訳のできる人が、とても少ないということである。言語ごとに、点字の文法がそれぞれ異なっているのである。大学で英語のテキストが必要となったとき、私もたいへん困り、途方に暮れた。だが、ちょうどその時期に高知に引っ越してこられた、英語点訳のできる方が、「なにかお手伝いできることはありませんか？」と名乗り出て下さったのである。つくづく、私は人の運に恵まれていると痛感した。現在は、その方を中心として発足した、英語点訳チームが、高知で活動中である。



英語点訳チームの成果「ハリー・ポッターと賢者の石」

イロイロと好き放題書かせてもらってきたが、突然の依頼にも親切に対応して下さり、カセットテープ・CDに朗読を吹き込んで下さる音訳ボランティアの方々、一字一字丁寧に点字本を作成して下さる点訳ボランティアの方々の善意ナシに、私達の読書は成立しない。ボランティアの方々に対して大きな感謝の念を抱いているし、感謝の気持ちを忘れてはならないと、私は常々思っている。このように、私の耳と指、そして多くの人々の力を借りながら、今日も私の読書生活のページはめくられてゆくのである。

（よしおかくにひろ／大学生）

土佐和紙展

ハバナ・WASHI－TENに参加して

玉造義隆

昨年十一月、キューバのハバナで「第七回ハバナ・ビエンナーレ展」が開催されました。

ハバナ・ビエンナーレ展は〝キューバと第三世界の美術の普及〟を目的として一九八四年に第一回展が開催されましたが、今日では世界で最も注目されている展示会のひとつであり、展覧期間中に世界中からアーティスト、キュレイター、美術評論家、美術関係者が集い、交流することで知られています。この展覧会に土佐和紙を使った高知の作家が招かれて特別出展し、「ハバナ・ビエンナーレ展」関連企画として「WASHI－TEN（土佐和紙展）」が開催されたのです。

そのキーワードとなったのは、〝土佐手漉き和紙〟でした。

高知では、県を代表する地場産品である土佐和紙の技術の向上と販路拡大を目的として、一九九〇年に第一回高知国際版画トリエンナーレ展が開催され、三年毎にいの町紙の博物館を会場に開催されています。

一九九九年の第四回展では外国人として初めてキューバのエドワルド・ロカ・サラサールさんが大賞を受賞し、受賞式出席のために来高したロカさんは、手漉きの実演を見学し、また高知市の画廊「星ヶ岡アートヴィレッヂ」を訪れました。これが縁で、芸術学校でロカさんの同期だった友人のキューバを代表する美術作家のネルソン・ドミンゲスさんが「星ヶ岡」で個展を行うことになりました。キューバにも手漉き紙の産地があり、ネルソンさん自身がこの紙を作品に用いている関係で非常に興味をもち、土佐和紙を通じてのキューバと高知の交流を呼びかけました。

こうして約半年後、キューバの文化大臣アベル・プリエト氏とネルソン氏からキューバでの交流展への招請状が「星ヶ岡」の平岡氏のもとに届き、彼の呼びかけに高知の作家二十四人が参加することになりました。この話を聞いて私もぜひ出展したいと、参加者の一人となったのです。

高知とキューバはよく似た気候です。自由で文化を大切にしている雰囲気が感じられ、治安も良く高度成長期以前の日本（昭和三十年代の生活、私が子供のころ）の暮らしぶりでしたのでなつかしくもあり、希望に満ちていたあのころを思い出し感慨深いものがあり、原点に戻る思いでした。

ハバナの旧市街は欧州風のクラシックな外観で統一された美しい街です。その中を五十年代のアメリカ車が、今も現役で多数走り抜ける様は壮観です。私の乗っている十二年前のポンコツ車でも、ここを走れば新車、うれしくなりました。

アメリカに経済封鎖されても元気なキューバ人の心意気なのか、この街にアメリカングラフティの世界が再現されているのには驚かされます。

「土佐和紙展」はハバナ市の中心にあるネルソン・ドミンゲスさんのギャラリー「ガレリア・ロス・オフィシオス」で開催されました。オープニング・パーティーには、キューバの文化情報局長が出席されたのをはじめ、会場に入りきれないほどの人達が押し寄せ、途中からは入り口のドアを何回も開け閉めして人数を調節しなければならないほどの大盛況でした。

大勢の人で盛り上がったオープニング・パーティー

今回の展覧会は土佐和紙がテーマですので、日頃土佐和紙を使って作品制作している高知版画協会の方々や、日本画、洋画、書、工芸、現代美術の各分野から集まりました。その中の一人が私となっていますが、皆様のご理解でタマリンの原画を土佐和紙に刷ったものを展示することができました。

当初は私自身の作品を出品するつもりで制作準備に入っていました。けれども和紙を手に取って見ていたら、タマリンが生前土佐和紙に似顔絵を描いていた姿が浮かんできました。妻も「ヨシローが生きていたらキューバの野球選手を描いて出せるのに」と言いました。

土佐和紙展の会場。様々なジャンルの作品が並ぶ

タマリンの原画を土佐和紙に刷れば版画作品として一緒に出品できるのではと、版画協会会長の坂上氏に相談の上A4判の土佐和紙百枚に刷りました。百枚の作品を一挙に発表するためには会場に行って直接展示するしかないと、ツアーに妻と二人入れてもらい現地入りしました。壁面は漆喰なのでピン等では直接留めることができず苦労しましたが、何とか工夫して紙を浮かして、壁面いっぱいの風に揺れる版画の立体作品に仕上げました。

初日は奇しくも十一月十八日、タマリンの二回目の命日でしたのでキューバで黙禱し、この機会を与えて下さった方々に感謝しタマリンの冥福を祈りました。

ハバナ市は、公共施設の多い社会主義国の強みを発揮し、図書館や集会場、教会等、街全体を会場化することに成功しています。ビエンナーレ展には地元キューバと中南米の作家を中心に、二百名ほどエントリーした作家が個展形式で作品を発表しているので、個々の作家の熱気がとてもよく伝わってきました。作品レベルも高く、アメリカ、ヨーロッパ中心のアートとはひと味違った作品が多く、新鮮でした。

筆者（左）と壁面いっぱいのタマリンの似顔絵

教会を会場としたデザイン作品ではコンピュータ・グラフィック全盛の日本とは違い、逆に新鮮で魅力がありました。演劇やコンサート、映画等のポスターばかりで、商品CMがないのはお国ぶりですが、政治的なものは見られず、スローガン等啓蒙的な作品が並んでいるだろうと想像していたのは、私の偏見でした。

死をテーマにした作品も多く、それはどれも暗く、観念的です。私の作品は逆に明るく、コミカルなものとなっています。これは同じ死をテーマにしても、想像か、現実かの違いだろうか、と思ったキューバでの一週間でした。

（たまつくりよしたか）

街のエクステリア「アートボード高知」

山本嘉博

高知市のおびさんロードに「アートボード高知」という、芸術文化イベントに的を絞ったポスターを一挙に十五枚も貼り出せる、チラシ棚と夜間照明つきの一大掲示板ができて早くも二年半になる。県の職員提案事業により「文化のパブリシティ活性化事業」として予算化され、民間県外企業である第一勧業銀行が場所を提供し、県民公募のデザインによって、行政機関の高知県が設置したものだ。運営は民間文化団体で構成する管理組合で、窓口業務は地元商店街の喫茶店が担っているから、土日や午後五時以降でも受け付けてもらえる仕組みだ。新しい形での官と民の役割分担が模索される昨今において、次代の行政と住民の関係の在り方を考えさせる、官民協働時代のシンボルとも言えるモニュメントにもなっている。

展覧会や演劇、舞踏、コンサート、映画上映などに的を絞ったポスターを屋外で一堂に掲示することでパブリシティ効果を高めるとともに、芸術文化イベントの企画を競い合う場としてまた、街のアートの情報スポットや若者の待ち合わせ場所にもなる、住民に愛される街のエクステリア（屋外装飾）として文化の街づくりにも貢献している。チラシ棚がついているところがミソだ。掲示期間は、原則四週間以内で、掲示の度に三百円の組合費を納めることになっている。集めた組合費で、掃除道具を購入し、掲示申し込みの十番目ごとに組合員の手でガラス拭きをしたり、毎年一年間に貼り出したポスターのなかから「いい感じポスター賞」を選出して、その発表と表彰もおこなっている。平成十一年度の利用件数は一四七件、平成十二年度は一八一件。利用頻度も順調に伸びてきており、ほとんどトラブルもなく、好評を博している。これまでに二回おこなわれた「いい感じポスター賞」の選出は、二年連続で横倉山自然の森博物館のポスターが最優秀賞となり、公立文化施設としてのセンスの確かさを誇っている。

巨大なガラス張りの掲示板ということで、設置前は不心得者による悪戯などが危惧されたりしたが、良いものを作れば手は出しにくい、行政だけの仕事にせずに取り組めば大丈夫との説得が実証された形になっていて、とても嬉しく思っている。新聞やテレビには、デザイン公募や選定、管理組合発足、オープニングセレモニー、最初の「いい感じポスター賞」の選出と表彰、と節目節目でパブリシティを高めてもらえた。おびさんロード商店街振興組合からは、アートボード高知管理組合の監事も出していただき、受付窓口を喫茶メフィストフェレスにお願いしている。管理組合の事務局は、四十年を超える活動実績を誇る高知市民劇場が担ってくれている。誕生のときから運営に至るまで実にたくさんの協力者を得たことが、当初の危惧を払拭できた最大の理由だろう。官民協働の値打ちはまさしくそこにある。

隣県徳島でもこれに倣って徳島市に設置の動きがあるようだし、県の「県民参加の予算づくりモデル事業」では安芸ブロック九市町村で「ふれあいボード〝みてみいや、きてみいや〟」というものが既に誕生している。さらなる波及が楽しみだ。

＊受付窓口　喫茶メフィストフェレス
高知市帯屋町２－５－23
ＴＥＬ　０８８－８２３－７８７１

＊事務局　高知市民劇場
高知市鷹匠町１－１－３
ＴＥＬ　０８８－８２３－２７１５

（やまもとよしひろ／県職員）

おんな三題

その三

真田順子

六十五歳以上の人が人口の七パーセントを超えると高齢化社会、一四パーセントを超えると高齢社会、二一パーセントに達すると超高齢社会と呼ばれる。高齢化の問題がマスコミに取り上げられない日はないが、その実、高齢者のこころは理解されていないように思う。

老年期。それを世間では喪失の時代、不安の時代と呼ぶ。社会や家庭での役割、健康や経済的自立、友人や伴侶、これらが順次失われていくことこそ老いるということに他ならないというのである。老いゆく過程は引き算だけなのだろうか。今日は老いと向き合う女性達の話をしよう。

Ａ女は七十四歳である。教員を勤め上げ、夫と二人暮らし。一人娘は県外に嫁いでいる。退職後に建てた立派な家があり、ご主人と旅行にも行く。趣味の絵画は展覧会に入選する腕前だ。ところが彼女は不満でいっぱいなのだ。

「お友達はみんな娘さんが近くに住んでいて毎日のように会っている。娘さえ同居してくれたら。娘が県外の人と結婚しなければよかったのに。老後をみてもらうつもりで育ててたのに、身勝手な娘に育ってしまった。料理をしてもつまらない。友達と食事に出かけてもうらやましいばかり。気分の良くなる薬を出してくださいよ、先生」。

七十六歳のＢ女。四年前に息子夫婦が戻ってきて同居するようになった。子供との同居で一安心かと思ったがそうでもないらしい。

「嫁と不仲ではないんです。ただ、私の洗濯物だけ残してあったり、テレビを見終えてお風呂に入ろうと思ったら、もうお湯を抜いてあったり。意地悪でもワザとでもないことはよくわかっています。お互いに一声かけるのがこんなに難しいなんて思いもしませんでした」。

結局彼女は家を出てアパートを借りて、一人住まいを始めてしまった。「家を乗っ取られたみたいですけど、この方がよほどさっぱりします。あと何年あるやらわからない私の寿命ですからね、したいようにしてみようと思いまして」。

七十八歳のＣ女は二年前に癌で夫を亡くした。自分名義の通帳ひとつ持っていない、ご主人に頼りきった生活であった。葬式だ、相続だ。遠方に嫁いだ一人娘とともに彼女を手伝ったのは近所の友人だった。

おっかなびっくりの一人暮らしは、思いがけず順調である。ほんとうにゆっくりのスピードではあるが、傷んだ屋根の修理、畳やふすまの張り替え、エアコンの購入を友人に相談しつつ自分で決めていった。そのうち彼女の家を人が訪ねてくるようになった。きけば相談事や悩みを話しに来るのだと言う。

「つましく暮らせば不自由はありません。娘の迷惑にならぬようにとばかり思ってきましたが、私でも人様に頼られたり相談されたりするんですねえ。私でも他人様に話して差し上げられることも多少はあるんですよ」。

どの人が幸せなのか、私にはわからない。七十年八十年と生き抜いて手にする果実である。生半可な知識で測れやしない。経験した人じゃないとわからない、そう言われるたびに、学習することの価値を切り下げられたようで不満だったが、こと老いることに関しては経験者にはかなわない。

（さなだじゅんこ／菜の花診療所医師）

高知を撮る　**競馬**（昭和40年　仁淀村）

第17回写真コンテスト入賞作品

仁淀村で行われた最後の競馬。年寄りから子供まで、皆が楽しみにしている行事のひとつだった。

中井秀夫

ナノ

時々、「ナノテクノロジー」という言葉を目にするようになった。「超微細技術」と訳され、文字通り、ミクロを超える技術である。たとえば血管の中を移動する探査器の開発など、まさに軽薄短小時代の最先端を行く技術である。ノーベル賞の白川さんが我が国の〝ナノプロジェクト〟のリーダーになった。

でも、「ナノってナンノこと?」と思う人が多いに違いない。当然のことながら、単位の呼称の国際ルールなど、一般の人々には無縁の存在であった。

ルールでは次のように定められている。グラム、メートル、リットルなどの千分の一を、ミリグラム、ミリメートル、ミリリットルのように呼ぶ。昔の一cc（立方センチメートル）は一ミリリットルである。

ミリの千分の一をマイクロ（μ）という。昔、千分の一ミリメートルをミクロン（μ）と呼んだが、今はマイクロメートル（μm）と呼ぶ。

マイクロの千分の一がナノ（n）である。ついでだが、ナノの千分の一がピコ（p）で、水や空気中の有毒物質の量がピコグラムで示されることがある。

ナノメートルやナノグラムで測られる材料を使って「ものづくり」をするのがナノテクノロジーである。

そんなことできるの?と疑うのは当然だが、立派な先輩がいる。先輩の名前は自然（またの名を神）、製品は「細胞」である。

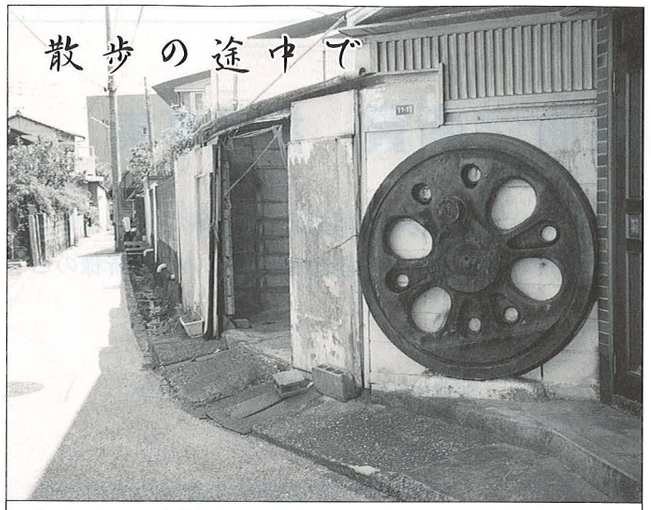
長さ数マイクロメートルの大腸菌が持つ蛋白質合成装置（リボゾーム）の長径は数十ナノメートル、私たちの細胞にあるミトコンドリアという、いわば〝発電〟装置も一マイクロメートルに満たないサイズである。つまり、ナノの世界は生命の秘密が宿る世界である。

ヒトはいよいよ神の領域に踏み込んでゆくように見える。「原子いじり」や「遺伝子いじり」でも同じことが言えるが、どうか、身の程を弁えていじってほしいと思う。

（路）

風俗歳時記

散歩の途中で



家の表に据えられた蒸気機関車の車輪。雨風にさらされて錆びついているが、堂々とした風情を残している。

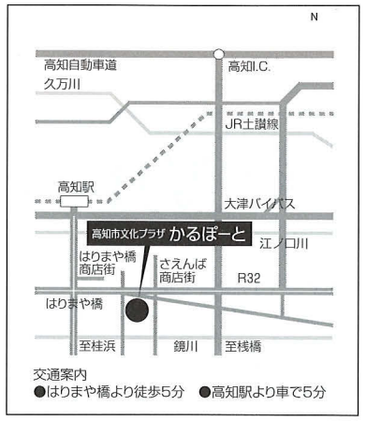
煙を吐き力強く走るSLの姿を想像して懐かしく思われる方も多いだろう。もっとも、近くにある小学校のこどもたちはこれが何か分からない様子であったが。

事務所移転のお知らせ

高知市文化プラザ（かるぽーと）の竣工にともない、㈶高知市文化振興事業団の事務所が、平成13年11月12日㈪より、下記に移転します。

現在、４月の開館に向けて急ピッチで準備を進めているところです。今後とも皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

〒780−8529
高知市九反田２番１号
TEL 088−883−5011(代表)
FAX 088−883−5016



今号の表紙

「panspermiaの習作1」荒木陽一

描き上げた絵に対する他人の目は案外気になるもので、展覧会場に行くと自分の絵を見ている人の背後で、こっそりその人のリアクションを見るのが好きだ。

ちなみに、モチーフが自画像の時は絵の顔を見るなり「怖いよぉ〜」と言って泣き出した少女がいたし、女性像の時には過去の作品の題名まで知っているような熱狂的な中高年の男性ファン?がいた。

（あらきよういち）

風伯

かあかあ様

『ふるさと発見―五台山の史跡・文化財―』（高知市教育委員会・平成10年3月）という一書がある。

同書が刊行された平成10年には、一部開港した高知新港への臨海道路と、五台山道路、高知空港方面へ延びる自動車道などが建設された。

案内地図や写真が豊富で、解説記事も的確。17名の編集委員が精魂を傾けた労作である。全76項目いずれも含蓄に富んだ話ばかりだが、一つだけ抄録してみよう。

「ふるさとが変わる。有史以来の五台山が姿を変える。自然と信仰の聖地五台山の山肌を買いて、巨大な4本のトンネルが走り、昔栄えた一つの地区が消滅する。」という次第で、このふるさとの姿を記録にとどめ、長く後世に残すために、同書が編まれたのである。

鳴谷に、三角錐のような形の大きな巌がある。昔の人がこの巌を神格化して、かあかあ様と呼び、旧暦5月15日には柏餅などを供えていた。

昭和の初め頃までは、子供たちがかあかあとカラスの鳴きまねをして、このお供物を頂戴した。

柳田国男著『日本の祭』の中に、日本各地のかあかあ様のいわれが取り上げられている。なかでも、愛知県亀山村の鎮守の祭では、少年たちがカラスのまねをして、参詣人の供物を片っ端から貰って食べるという。

（念）

文化高知 No.104 [隔月発行]
2001年(平成13年)11月1日発行
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(088)873-4365/郵便振替01680-5-14869

第12回 高知出版学術賞　推薦募集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】
次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。
①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
②2001年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】
自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい(図書は返却しない)。なお、推薦書は請求下さればお送りします。

【受付期間】
平成13年12月10日(月)～平成14年1月31日(木)

【表彰】
3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】
(財)高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会

第18回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

【テーマ】高知を撮る
・高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

【応　募】
・どなたでも、一人何点でも応募できます。
・254㎜×365㎜(ワイド四ツ切)以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。

●第17回入賞作品

・組写真は3枚までで、写真の順番と組写真であることを明記して下さい。
・その他詳しい要項は事業団までお問い合わせ下さい。

【応募締切】平成14年1月31日(木)

【賞】　特選　2点(賞状と賞金5万円)
　　準特選　15点(賞状と賞金1万円)
　　入選　70点以内

【作品展】
平成14年5月高知市文化プラザかるぽーとにて開催予定

【応募先】
・(財)高知市文化振興事業団
・高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

※次回からは内容を新たにして実施する予定です。